

「体育基礎」の指導を通して

田 口 機 子

文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻

(2006年11月8日受理)

Thoughts from Instructing Students in “Basic Physical Education”

Faculty of Cultural Development, department of Cultural Development,

Major in Primary Education,

Gifu Women’s University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

TAGUCHI Noriko

(Received November 8, 2006)

本来子どもは、動くことが大好きで本能的に動くことが多いが、遊び・体育は、幼児・児童の生活の中で非常に大きな役割を担っている。遊びや運動で体を動かすことで、からだづくりや心身のリフレッシュができるよさがある。現代の子どもたちの体力のなさ、心のひ弱さ等を考えると体育の重要さが分かってくる。

そこで大好きな運動を組織的に仕組んだ体育の授業は、運動技能を身につけると共に、一緒に運動する仲間とのあり方を学ぶ場としてとらえた。すなわち、運動を通して人との関わり方を(集団)学び、人と関わりながら運動を学ぶのである。そのためには、児童の心身の発達、運動の技術発達、集団の発達を把握することが重要になってくる。

将来、教師を目指す学生に、多様な運動を指導者としてもう一度自分自身が運動体験、学習体験をさせ、運動が出来るようにすると共に身を持って仲間との活動から得る充実感、感動を味わい、自分を見つめ直して自分づくりにつなげることを目的とした。

学習指導要領に内容を1年間かけて一通り

実践することで、運動のやり方、ルール、つまりきやすいところ、学習の仕方等を理解できると考えたからである。

1 学習指導要領に示された内容

指導要領では、2学年を一区切りとして内容を設定している。例えば1・2学年では

A 基本の運動(走・跳、力試し、器具・用具を使って、用具を操作の運動遊び)水遊び、表現リズム遊び

B ゲーム(ボールゲーム、鬼遊び)

高学年の5・6年では

A 体づくり運動(体ほぐし運動、体力を高める運動)

B 器械運動(マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動)

C 陸上運動(短距離、リレー・ハードル走、走りとび・走り高跳び)

D 水泳(クロール・平泳ぎ)

E ボール運動(バスケットボール、サッカー、ソフトボール又はソフトバレー)

F 表現運動(表現、フォークダンス)

G 保健(けがの防止、心の健康、病気の

予防)

これらの内容を、2年間の間に習得するのである。

2 学習内容

体育基礎で学生に身に付けさせたいことは、それぞれの運動の技術ポイントの習得、つまずきに応じた指導(運動の側面) 仲間作り、トラブルの解消等(集団の側面)の2点である。

運動と仲間関係づくりを計画的に進めるために全時間の学習計画を載せた学習ノートを作成し、学生も15時間の見通しをもって学ぶことが出来るようにした。後期の授業のオリエンテーションで次のように言っている学生がいた。

・・・後期の学習内容は、自分の苦手な競技もあるが、それを行う際は、できない子どもの気持を意識していきたい。そして、出来るようになるためのアドバイスを考えていきたい。

また、1時間ごとに技能のポイントや振り返りが出来るようにした。例えば

7・8時間目

ゲーム~サッカー

低学年のゲーム から サッカーへ

個人技能

蹴る(まっすぐ、味方のいるところへ)

受ける(キーパー)

投げる(フィールドプレイヤー、キーパー)

集団技能

攻め方、守り方

上記を、キーワードにして授業の中で、一人一人の技能練習やチームでの攻め方や守り方を実際にやりながら考えるようにした。授業の終了時には、次のような項目で自分を振り

返し、考えを書くようにした。

楽しんで進んで動きましたか
運動のポイントが分かりましたか
友達の動きをみて褒めたり、教えたりしましたか
自分の役割を果たせましたか
仲間から一つでも認めてもらいましたか

というような項目を毎時間チェックして、考えや動きぶり、仲間との関わりを振り返るようにした。運動によっては、その特性によって項目は多少違うことがある。運動技能については、小学校の児童を中核にしているので何処まで求めるかを常に意識させた。

体育は、運動を身に付けると同時に人間形成(社会性)を身に付けることを意識しているので集団づくりには力をいれて取り組んできた。集団は、次のように発達すると考えているので、これを大切に組織にした。

仲間

参加	適応	貢献
連れ	仲間	同志
安心	助かる	いないと困る
同調	協力	連帯

決まり

情緒の解放	トラブルの解決	行動の統制
維持的	融和的	団結的

役割

活動の遂行	つまずきの克服	総力の発揮
-------	---------	-------

低学年から徐々に発達するはずであるが、体験がないと、高学年でも参加段階から指導をする。しかし、年齢が高くなれば集団の発達には短い時間で貢献しあえるグループに育っていく。

体育基礎の仲間作りについては、次の観点で考慮した。

- ・学習グループのメンバーの数
- ・役割を持たせる(時々交代)
- ・決まりを作る
- ・仲間の心を大切に

学習集団は、1年生から6年生までの発達段階を考えると、児童の力でまとめていける人数を考えなければならない。

低学年は、3～4人、高学年は5～6人をめどに編成する。

役割は、集団機能を充実させるために、リーダー(L)、パフォーマンスオブザーバー(PO技能観察係)、メンテナンスオブザーバー(MO態度観察係)を位置づけて、課題達成に向かって活動できるようにする。

Lは、集団の課題達成のために方向性を示していく。POは、メンバーの技能向上のために技術ポイントを示したり、練習方法を提示したりする。MOは、メンバーの取り組む姿勢について観察をして認めたり、問題点の提示をしたりする。

ただし、POやMOは高学年から位置づけて中学校へ結びつけて行く。集団が充実していないうちはLがその役割を果たしていく。各役割が果たす仕事内容は、発達段階を考慮して、簡単から複雑へと変化させていく。こういったことを授業実践をしながら学生が理解出来るようにする。このような考えの基にチェック項目の中に「役割を果たしたか」という項目を位置づけた。

3 実践例

運動の技術発達(運動の側面)と集団の発達(集団の側面)を考慮しながら実践を行ってきた。

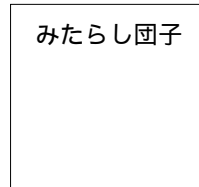
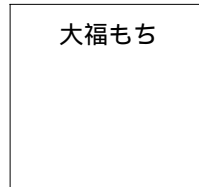
(1) 運動の側面

例 「サッカーボール」

めあて ルールを理解してパスをつないで楽しくゲームをしよう。

- 基礎技能 大きく蹴るパス
 広がってパス(縦に走る)
 持ち場の意識
 横パス

実践 大きな声を掛け合いながらパスをしていたが、最初はボールに固まってしまう大きなパスが出来ない。これを、ボールをあんこに見立てた「大福もち」とわかりやすく説明し、広がるように指示をする。次に縦に広がって、よこ(サイドライン)を意識しないので「みたらし団子」とたとえて横に広がるように指示をした。一本の串が刺さるように縦に立っているのみたらし団子と言って分からせる。これは小学生にも良くわかる言葉でもあるからである。



また、ここで指導者として意識させたことは、見学者の扱いである。

見学者は、病気けなどが考えられるのでどう扱うか考えさせた。一応授業場所へ出てきたことを前提とした。

ある学生のノートより

外から見るとということは、いつも見えな
 いところが見えたり、全体が見られたり
 するのでよく見てサイドコーチをする。
 又は、点付けや、ラインズマンをする。

攻めるとき、どうしてもみんなボールに
 よってしまったり、真ん中によってしま
 うので、サイドラインの方も使って大き
 く攻めるようにする。最初はボールばっ
 かみてしまって、相手を見ながらパスを

するのが難しいので、欲しい人が、「ハイ、こっち」とか声をかけてやるようにする。キーパーは、全体が見えるので何処が空いているのか声をかけたり、DFに何処を守るのか指示を出すといよい。スペースがとても大事になると思うので、空いたスペースにパスを出し、もらう人はそこへ走り込んでいく。今日はチームで声を掛け合いながら出来て良かった。チームどうして試合をしながら一人一人の良いところが見えてきたし、出来ないところは、補って出来て良かった。

というような、振り返りが出来た。また別の学生は、

略・・・KさんとMさんは、一生懸命審判しているのが印象的だった。また、試合中に自ら「ハンド」といっている姿が見え素直でいいと思った。小学生が、サッカーをやる場合、やはり男女の技術差が出てくると思うので上手な子ばかりでやらないで、ゴールしたら男子は1点、女子は2点とかいろいろ工夫してみるのもよいのではないかと思った。そうすると女子にもボールが回って来るのではないかと思う。

と小学生をイメージして考えている学生もいた。

(2) 集団の側面

授業の最後に必ず仲間への働きかけについてチェックしているが、友達をよい所などを認め合ってきた。前期を終えたときに

この授業を通してグループで技術向上のための教え方を考えたり、出来ない子のことを考えたりすることが出来た。自分にはアイデアを教えてもらったり、自分の意見を受け持ってもらったりしてグ

ループの団結力を高めることが出来た。普段はあまりアイデアだせない私ですが、グループのみんなが温かく受け入れてくれて嬉しかった。・・・

中には、非常にメンバーとの関わり方を悩んで次の課題を見つけた学生もいる。

大変密度の高い体育だった。今までここまで考えないでただ参加するだけだった。グループの在り方を一番考えた授業だった。つれ以上仲間未満のグループだった。後期は、少しでもよい方向になるよう頑張る。仲間以上になれるように

等とグループの在り方が少しずつ分かってきたようである。グループで活動することで仲間のよさをが分かったり、自分を見つめ直すことが出来たりしてきているようである。

4 まとめ

以上のように、計画的に実践をつんできたが、学生の体育についての考えや、体育基礎で学んだことなどを調べて見ると次のようになった。50%以上の学生が答えているものを上げて見る。

体育は

- ・健康のために必要
 - ・仲間作りができる
 - ・心が鍛えられる
 - ・人間勉強になる
 - ・技術が身に付けられる
- などと思っている。

体育基礎では、

- ・たくさんの運動が経験出来る。
- ・仲間の大切さが分かった。
- ・運動の指導ポイントが分かってきた。
- ・運動それぞれのルールが分かってきた。
- ・体づくりの必要性を感じた。
- ・運動のやりかたが分かった。

と答えているのでこちらが考えていることを

徐々に理解しながら取り組んでいることが分かる。

計画的に進めるためのノートも最初のページに示したように誰もが見通しをもって考えられるようにしたい。運動と同時に仲間の大

切さも分かってきているようでこれからも、動く楽しさ、仲間と取り組む楽しさや苦しさを十分味わいながら、人間性豊かな女性、豊かな指導者をめざすことを基盤に実践を積んでいきたい。